
ナルトなのに大蛇丸

茶摘み鶏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ナルトなのに大蛇丸

【Zコード】

Z5351T

【作者名】

茶摘み鶏

【あらすじ】

寝て起きたら大蛇丸になっていたのは、なんとナルト。だけどこのナルトただのナルトじゃない。

大蛇丸になったのが、ただのナルトじゃない。原作そのままでも、くれたナルトでも面白くない。そんなわけでこのナルト、実は前世の記憶をもつたままの成り代わり主。

そんなナルトが逆行してたどり着いたのは、なんと過去の世界。それも大蛇丸に成り代わっていた！？

ナルトな転生者が、さらに成り代わってしまった。そんな【もしも】

が複数かけあわされた異端な物語。
それを確認したうえでご覧ください。

〇〇 つずまきナルトな人生（前書き）

この物語はナルトに転生した人物が、大蛇丸になつてしまつという。
・・有利得なすぎる【もしも】ワールドです。

ナルト主が主人公な別のストーリーは、また違う場所で公開中です。
なお作品はあくまで作者の願望によつて生まれた【もしも】話なので、有利得ないと思うようなことが多々あるかもしれません、そこはどいか笑つてスルーしてください。

ひたすらギャグを目指しているので、完全に原作破壊になつてしまつます。なお作者は国語能力ないので、いつもどおり「一人称」視点で物語りは進みます。

同作者による投稿済みの『飴色疾風伝』で「クロフデアザナ」という人物が出てきますが、作者に名前センスがなく、そのために同姓同名なだけであり、物語自体には一切関係もつながりもありません。上記のことが一つでも許せない方はユータンを。

それらを踏まえたうえでお読みくださいますようお願いいたします。

〇〇 うずまきナルトな人生

オレはうずまきナルト。

前髪の一部が赤いメッシュで、封印術と医療忍術が得意だ！

え？ “うずまきナルト”と違うはずあるって？

そりゃあ、やうだらう。

だって。しょせんオレは、前世の記憶があるので、“成り代わり”というやつだ。

その成り代わりの影響なのかここが原作と同じとく違う世界だからなのかわからないが、オレは『うずまき』の血が濃いので、前髪の一部が赤いメッシュになっているし、原作のナルトのように多重影分なんかできないから。

あつはつは。

だめだめだよな。

たしかにオレだつて NARUTO は知っているよ。
オレと“本当のナルト”じゃ違うさるものわかる。

それでもこの世界のナルトはオレなんだ。

前世ではこの世界のじとせ、NARUTO といつ漫画になつて
いたから、ある意味では未来を知つてことになるけど、この世
界は原作と違はずさるし、まずオレの記憶力があいまいで、原作知

識とか無意味だ。

前世の記憶がある だから、オレには『ナルト』ところの名前以外に、もうひとつ名前がある。

クロフード アザナ。

これは前世のオレの名前だけ、とつあえずこの世界では偽名のときこのみ使っている。

さて。オレのことを話すには、長くなってしまうので、ある程度割愛させてもらひ。

実のところオレの転生理由は、ひとつ。

死んだから。それも友人と遊びに行つた先のデパートで爆発事故に巻き込まれてね。

死んだのは間違いないくて、そして何度も転生もしている。

その記憶が全部ある。

かなりあいまいだけど。まあ、あることはあるのだから嘘じやない。

どんだけ転生しまくったとか言われても・・・「数え切れないので」としか言ひようがないのが現実だ。

とりあえずどう転ぼつが、おかしからうが、この世界のナルトは“オレ（クロフード アザナ）”であることだけ覚えておいてほしい。

IJの世界の“うずまきナルト”は、前世の記憶とその影響を（若干）持ったまま生まれたが、所詮ナルトにかわりはないと考えてくればいい。

つまり、成り代わりとこいつより、オレ自身がこの世界でのナルトなんだってこと。

“アザナ”の来世がナルト。
“ナルト”的前世がアザナ。
それだけのことだ。

ただ。それだけといひには、オレは前世の記憶があつたりと、いろいろイレギュラーすぎるけれど・・・。

まあ、簡単にいってしまえば、IJはNARUTOはNARUTOの世界でも平行世界といひやつだ。
この世界のナルトには、前世の記憶がある。
前世の経験をいかせる。
原作と違った流れを歩む世界。

それだけ認識してくれれば、オレを含むこの世界はまわる。

はなしておかなければいけないのは、ふたつ。

まずオレの能力だ。

前世の記憶があるせいか、本当にオレってやつは原作のナルトらしくないんだ。

他の世界ではチャクラはなかつたが、「氣」や「オーラ」などと呼ばれる生命エネルギーをわざとして使うチャクラに近いものがあった。

おかげでオレは、ナルトになつたあと、チャクラはないのに、チャクラコントロールだけは抜群にできた。

そのコントロールの影響で、気に敏感なオレは、ついに肉眼でチャクラの“流れ”が見えるようになつた。

ちなみに特典はコレだけである。

そしてオレがいることで変わつてしまつた流れについて。
転生したオレが一番最初にしたのは、九尾とマダラをしめること。
前世の能力なんか付属されてないし、転生得点は『なぜか修行してもチャクラが増えない』ことだったので、得点というよりも不利益にしかならない。

なので、精神世界でまず九尾を、精神世界で捕獲し、オレのないチャクラの供給源の代わりになつてもらつた。
つまり、オレと九尾は仲良しということだ。

そんなこんなで、オレがナルトとなつた世界は、凄く平和で、物凄く人口密度がいつも多かつた。

だつて死ぬ人がみんな生きてたんだから当然といえよ。

筆頭は四代目夫婦が健在であること。

そしてここからが世界の修正とでもいうべき段階。
原作との違いだ。

まず波風ミナト　　彼は“自分の息子がマダラのよつな悪党に狙われていた”ことが発覚した後、なにを血迷つたか、心配性が間違つた方向に進み、物凄い過保護に進化を遂げた。

それでいつもオレは父ちゃんと追い掛け回されてるし、父ちゃんは四代目火影だからつて暗部（火影直属の部隊）が迎えに来る。仕事

をしてくれと。

あれはみていて暗部さんが痛々しい。

さらには、母・つづまきクシナ　彼女の料理はたしかにうまい。うまいのだが、彼女が作る菓子という西洋菓子は、なぜか謎の生命体となるという七不思議。

おかげで木の葉の里中であるとき甘いチョコレートの匂いが蔓延し、奇声を上げて酸を吐き出す茶色の生き物がかっぽするなど・・・・・被害は甚大である。

大蛇丸はオレの必死の頼みで里に残ってくれている。

今は母さんが作る謎の生命体となる菓子を処理してくれる里のヒーローとかしている。

そうそう。原作で話題を呼んでいるひづは一族だが、あれらと里は和解し仲良しだ。

ついでに、田向ツインズは両方とも顕在である。
なぜならオレと父さんによるおいかけつこの最中、ヒナタ誘拐事件なるフラグをうっかり踏み潰してしまったので、双子は一人そろつて健在で、うちの父にふりまわされてヒーヒー言つているが楽しそうに人生を謳歌している。

ちなみにダンゾウや根は、四代目たる父ちゃんが制圧した。
暁なんて、慈善集団の最前線だ。

三代目は四代目が生きているので、田々有意義に老後を暮らしている。

ちなみにサスケは極度のブランで、里抜けなんかするはずもなく、普通にまだいる。

それにこの世界には音の里がないから当然といえば当然かもしだれなり。

ついでにサスケは途中から原作と同じよつて、オレとは班がわかれサイが七班になっている。

なぜかというと、金色の父ちゃんの奇行を知る数少ない存在のなかで冷静な判断を下せる彼は、ついに暗部に指示を出すまでになり、

いまでは暗部にたのまれ彼らを指揮し、日がな一日オレをおいかけまわす超過保護な波風ミナトを火影の椅子に戾らせるべくサクを張り巡らしている。

サクラちゃんは綱手の弟子となつたので、パワーがハンパない格闘センス抜群の忍者になつた。

医療忍者としても優秀だけど、彼女は最近、対四代目火影用に格闘にこつているので怒らせたら一番危険な存在となつていて。そしてオレ。うずまきナルトは、チャクラコントロールを生かした医療忍者になつた。

でも得意なものは、うずの国の封印術。

だつてオレは赤メッシュのナルトだからね。

この世界 本当にちがいすぎる。

そういえば16歳ぐらいのころ、ヒル「の『血継限界奪つて第三次忍界大戦おこすから力カシをくれ』なんて事件もあつたけど、「命を大事にしない一番の大バカカカシ」にぶちぎれた父ちゃんが避雷針の術で乗り込んで、あげくオマケとしてつれてかれたオレは九尾を開放させられ まあ、戦争とかそういうことはなく、ことなきをえたのかな。

あと砂の任務で、過去の父ちゃんと出会つて散々な目にあつたりとか。

それを里に帰つて思い出した親父と、さっそくバトルをしたり。

なんかいろいろあつたなあ。

まあ、オレのいることで変わりつつも流れた時間はそんな感じだ。

そんな（とにかく人口密度が激しく多い）世界で、大人になつた赤メッシュな『うずまきナルト』なオレ クロフ^{ヒテ} アザナ。

ただいま六代目火影です。

物凄く疲れています。

なつて・・・

書類整理に。

恐るべし火影の仕事！

忍具を持つより、ペンをもつている時間の方が長い。

うでいて～。

「寝ていいかな? ってか、もう徹夜何日目だおい」

隈がくつきり浮いているだらうオレの顔。

そのまま書類を見ているうちになんだかめまいまでしてきて

オレはそのまま意識を失つた。

それが長い長い夢の始まりとは気が付かず。
悪夢は寝不足のせいだ。

わっとうだと・・・そう思っていた。

00 うずまきナルトな人生（後書き）

主人公はナルト成り代わり主です。
それを前提において置いてください。

01 大蛇丸に成り代わり

おはよーと起きたら小鳥がピピピと歌を歌いながら挨拶をしてきて
優しい花の香りが鼻をくすぐる
窓を開けたらそこはおとぎの森
さあ、朝の挨拶をしよう

おはよー

その掛け声で妖精が

「起きたら謎の実験器具がピッピッピと脈を刻むような音を立てて
います。

鎧びた鉄のようなにおいと薬のにおいが混じつた悪臭で鼻をふたぎ
たくなります。

窓を開けても外はじめつとした真っ暗な森の中。

自力で目覚めたオレの日に一番最初に飛び込んできたのは死体でし
た」

どんだけだよこの状況。

* * * * *

黒筆アザナ。もといつずまきナルト。

寝て目が覚めたら

「ありえねーありえねーありえねー……ありえねーってばよおーー
なんだこれはー!?

寝て、起きたらそこは知らない天井で、知らない部屋。

つというか、なにかの実験室らしく、ぐだにつながつて機械音を立てている人一人はいりそな巨大な試験管が数本。むしろ中にひとが入つているのはむづこのさい見てみぬフリをしよう。

さらにいうと、壁には鎖につながれた死体。

テーブルらしきものや床には、黒ずんだ血の痕と、なにかを書き記した書物の山。

ハイ。どこからどうみても実験室ですよ。

それもかなり猟奇的な。

「・・・・・・

つて

「なんだそりゃ――――――」

ぬけやくせや旦惑につつもとつあえず自分の姿を確認しようとつゞく、周囲を見回し、やつぱり鼻につく匂いに頭が痛くなる。

でも自分の姿を確認しないといけない気がする。

だつて自分の中に九尾の氣配がないし、なんか身体も違和感があるし・・・むしろ田の前にたれているものが黒くて、オレの髪が黒いつてことにびしきりもしない嫌な予感がするわけで。

鏡を探して、とつあえず身近にあつた試験管を鏡代わりに、そこには映つたものを見て、一気に血の脈が引いた。

黒くてカラナカの長こ髪。

少し色のぬこ肌。

いやいやいや――まつまつまつ――

転生し続けていふとしひもオレの髪は、今回も黒くはなかつたはず。

そうだ。しかもいまオレは、つづまきナルト。

髪の色は?

黄色に近い金。前髪だけ赤色のメッシュ。

だつて父ちゃんそつくりの青色のはずで……

年は49歳のはずで。

なのになぜ自分と思われる姿と鏡の中の自分ツジが違つ――?

しかも――

しかも――

「いくつまで逆行してゐるのよオレえ！－！」

オレさオレさ。火影の仕事に疲れて執務室につつぶして昼寝して
ただけだよね？
なのになぜだ！？

なぜオレが

こんな こんな・・・

「なんで天下のオレ様火影様なオレが【大蛇丸】になつてゐんだよ
おつ！－！」

ありえねーよ、おいい！－！

「なんでだよ！－てかなんだってばよ」の//マムサイズは－－！
－！」

「この世界では“おーちゃん”。

里でも以外と、外見や言動とは裏腹に世話焼きとして有名だった三
忍。

でも、やつぱり（ちよつとだけど）変態。

その名も大蛇丸。

気が付けばオレは、大蛇丸になつていた。
しかも原作開始時より若干若いです。

黒髪にあつ?

工へ

つて

ちがうだらうオレえ！――！

02 ありえないことばかり

それは【原作】より数十年前のこと
その忍の世界は、まだ始まつたばかりの戦に呑まれていた

そんな時代の 後の伝説の三忍がひとり大蛇丸は 怪しく笑った

嘘はよそう

真実をあなたにお伝えしますと

三代目火影、猿飛ヒルゼンに、“彼”はわらう

目が覚めたら大蛇丸になつていたアザナことつずまきナルト。
成り代わりはともかく。

大蛇丸とか有り得ないんですけど！？

大蛇丸といえば、NARUTO世界における四大敵役といつても過言ではないはず。

まあオレがナルトだった並行世界における大蛇丸は、里のヒーローでいい奴だから別だ。

それより、なんでこんなことになつたか分からぬ。
しかも大蛇丸。

始めていた部屋には長居したくなくて、プチパーティになりつつとにかく部屋をでて、勝手に家搜しつつ、そこでベッドをみつけ布団に潜りこんだ。

それからなぜこんなことになつたと、丸一日飲まず食わずに悶々わらず散々考えたけど、寝たからと書いて夢落ちになるわけでもなく、日がたつに連れ逆になんか落ち着いてくる。

3日目に鏡をしつかりみて、色々試して、そこに映つてているのが自分だとようやくあきらめもついた。

つと、いうより暫くまた騒いでた。

だけどそれにより突然ぶつんきて、自分のなかで急激に醒めた。
とりあえず自分の状況を把握しようと、一日間引きこもつぱなしだつた部屋をでた。

まずは家捜しから。

家というより館だらう。

その広い敷地内をあらかためぐり、地下に異臭のする研究室らしき場所を発見し、そういうオレが目覚めたのはここだつたと眉をしかめる。

普通の精神なら直視は耐え難い環境。

まだ若さのあつた鏡のなかの大蛇丸の姿を思い出し、三代目はまだ大蛇丸の悪行には確信にいたつていらないだろうと思い至る。もしかするとまだ気付いてさえいない可能性もある。

そういうえば原作で、大蛇丸が変わったのは二十歳頃で、両親の死が原因だとかいつていたようないような・・・。

まあ、そのへんは本人に聞いたわけでもないし、ましてやあいまいなオレの原作知識からはなんともいえない。

だからって そこでなぜカマ街道を選んだのかは意味不明だしかしかりたくもない。

やはり中途半端にしか記憶がないから、元に戻れたら大蛇丸にじかに聞こつ。

「にしても換氣扇ぐらいくつあるよなあ」

まあ、忍がそれじゃあだめなんだろうけど。血のにおいかぎつけられちゃつたら意味がないしね。

オレは資料が散らかり、腐臭漂わす部屋を見回し溜め息ひとつ。オレ、医療忍者なんだけど。

確かにバイトで姿を変えて、“アザナ”と名乗つて、暗部系列の開発部にいたことはあるよ。

そこでは拷問系チームと仲良くなつたりしたさ。人体実験もしたさ（微妙にだけどね）。

それに死んだ患者も数多くみてきたから、死体は見慣れてはいる。だけど生かす立場のオレに、この状態は言葉がなくなるほどビックリだ。

やれやれ今オレが大蛇丸なんだぞ。

この現状を見られて、三代目に疑われたらどうしてくれるんだ？ 里抜けしなくちゃいけないじゃないか。

とにかく49年間の相棒である九尾キューちゃんに助けを求めるようとして、魂の半分たるあいつが傍にいないことを思い出し、しかたなく“人間が使える忍術”的印を組む。

いままでは自分のチャクラが少くて、九尾やら他人からチャクラを補給してもらわないと使えなかつた忍術。

それも肉体が大蛇丸である今は、できなかつたことも、普通の忍以上に簡単にできる。

それほどのチャクラがこの身にはあつた。

「燃え尽きり

オレが印を組み終わると、とたん死体や実験器具などに黒い炎があがり、一気に燃えていくがそこに熱はない。燃えカスも、灰も、こげ後もにおいも・・・なにも残さない黒い炎。オレがナルト時代に開発した新術だ。見本は、イタチにみせてもらつたアマテラスだ。

因みに資料は全て目を通した後、同じように消した。

もし本当の大蛇丸が帰つてきたら?

そんな心配は資料を読んでありえないことだとわかつていた。なので遠慮せずすべてを燃やす。

たとえ本人の魂がこの肉体に戻つてきてオレが追い出されようとも気にもならないし、だいいち本人が帰つてくることは『有り得ない』のだ。

オレが燃やした資料にそのことがかかっていた。

そもそもオレが、“こう”なつた原因は、この世界の大蛇丸が原

因だつた。

大蛇丸は、転生術やら永遠の命をもとめて、その研究にいそしんでいた。

その原因是、やはり彼の両親の死。そうして実験を繰り返していくにつれ、ついに今回の実験に到達した。

それは魂の召喚のようなもの。

しかし失敗に終わる。

そこで転生やトリップと相性のいいオレの魂が、彼の失敗した術に巻き込まれコチラに飛ばされ、本人は死亡し、オレがここにいるという図式が成り立つてしまつたらしいのだ。

もし大蛇丸とオレが完全に入れ替わつて、向こうのナルトであるオレの中に大蛇丸がいたら泣くけどね。

でもそれはたぶん不可能だ。

だつて“オレの魂の半分”は、まだ“向こう側”で生きているつてわかる。

なにせオレ、九尾と魂融合しちやつてますから。

成り代わつて、生まれて49年。

長いその年月の間いろいろあつた。

チャクラ供給源として母・うずまきクシナから九尾を自分の身体に取り込み、オレが新しい封印式をつくつて自分の中に封じなおしたり、そんなこんなで九尾と一緒にいたせいでオレたちはいつのまにか魂が融合していたのだ。

だからわかる。

ぶちやけ今の大蛇丸に憑依しているこの状況は、魂が半分しかない状況なわけだ。

つてことは、向こうのオレの身体の中にはまだ九尾がいるわけで、向こうにいけたとしても大蛇丸ごとき人間の小さな魂が九尾の魂にかなうわけもなく、はじかれるか消されてしまうわけだ。

オレは・・・・・ そうだな。

たぶんこの世界で死ぬかなにかすれば“オレは”元の世界に戻れるはず。

ただし、オレは。で、あつて、魂だけ行方不明の大蛇丸のことはわからない。

まあ、オレなんかは、向こう側に自分よりばかでかい魂の半分がいるから、引力で引き戻されると思うんだけど、今は肉体っていう器が邪魔でもどれないんだよね。これがさ。

それにもうずまきの血が濃く封印術にたけ、さらには九尾の力を我が物としていたオレと、伝説の三忍になる前のたかだか大蛇丸じやあね。

さすがにチャクラの量も経験も質も、なにもかもが違うわけよ。うん。ずばりいおう。

この世界の大蛇丸は、オレが消えても戻つてこない。オレは死んだらもとの世界に戻れるけど。

それが尾獸と混ざった人柱力と、人間の差。

ありえないですね。はい。

そんなわけで、大蛇丸になつたアザナなうずまきナルトです。

「あ、やべ。壁と家具まで燃やしちゃつた」

「あお～っとしていたら、うつかり壁まで燃え尽きた。
がら・・・

「あ・・・」

黒炎で消失した場所から、壁が一部崩れた。

そこからきれつがはいり、徐々にそれはひろがっていく。

そのままパキンとおどがして、巨大な天井の欠片が降つてきた。

そこになにか嫌な予感がし・・・

がらがらがらがらっ！――！
ドッゴン！――

大きな音を立てて、支柱を失った家が倒壊した。

地下だつたせいで、 “余分なもの” まで消してしまったようだ。
だめじやんオレ。

大蛇丸に成り代わつて三日目。

寝てただけで怠惰にすごしたたつた三日のその家は、 じんじんそちら中にヒビが入つていく。

必死こいてふつてくる瓦礫を長年の経験と感だけで避けつつ、地上に向かつた。

「 めいやあ～～～～！――！――！」

派手な倒壊音がして、瓦礫から這い出てきたオレがみたのは、しめつた感じの暗い森。

さつきまで建つていた見事なほど陰湿な日本家屋は見えない。

それに呆然とするオレを笑うように、鳥がけたけたと笑つた。

「なにがあつたんだい大蛇丸！？」

「いまの音はなんじや！？」

誇りまみれで呆然とたたずむオレの前に、シユタツと若い少年と少女が降り立つ。

大蛇丸と同じチームの若き綱手と自来也だつた。やがて土煙が晴れ、二人も状況に気付き、あまりの惨事に呆気に取られていた。

「な。なによあれ！？」

ようやく我に返つた綱手が、家のあつた場所を指して悲鳴を上げる。家のあつた場所には家だつたろう瓦礫。そして

「花・・・かな？」

「しつかりしな大蛇丸！そんなものみりやあーわかるのよーーー

「おぬし・・・なにをしたんじや？」

「え。なにつて室内で焚き火を」

「「それでなんで花が咲く！？」」

「・・・焚き火した自分が言うのもなんだけど、花より室内で焚き火をする危険性を問うべきじやないか？」

「「家を壊すだけの花が突然育つ方が大事件よ／じや！..」」

なんか愉快なまでに悪質な黒と赤色のまだら模様の巨大な食虫植物が咲いていた。

しかもあれ、口がある。

キバがギラギラしていて、シャーとか言つていい。

やべえ。なんか家全体が薦で覆われて、わきをよりもわきにやばいことになつてる。

あれ？

なんで花？

だつて支柱を壊したから家が崩壊したならわかるよ。
けどなんで、花？

「いやあ――――――――――おじかけてくるう――――」

「なんじやあ！なんじやなんじやあつ―――わしながらをくつてもう
まくないつてのよ――――」

「火遁がくわれたあだとお――ああああああああああああああ

――――――――――――――――――――――――――――――――

「バク！バク！バク！　　バクッ――！」

「――――――――――――――――――――――――――――――――

その後、必死で逃げた。
綱手と自来也とオレで。

だつてあの花は、オレたちを標的にするや否や、忍も真っ青なスピードでおいかけてきた。

どうすごいかつて、薦を伸ばすなんてどつかの触手系妖怪のように伸びしたりして襲うなんてことはせず、根っこを地面からおじし、その根を足のように動かして【走つて】追いかけてきたのだ。

しかもなぜか火遁が利かない。

あとあと森の中を騒音を立てて追われていたオレたちは、なかなか集合時間にやつてこないオレたちを心配した猿飛ヒルゼンにより事件は幕を閉じる。

後にわかつたことだが、あの花ははじめから大蛇丸の研究室にあつたらしい。

もともとは任務の最中に大蛇丸が見つけた突然変異種で、たまに綱手とかもその花の様子を見に来ていたらしい。

もしかすると医療か何かに使えるかもしないといつことで、三代目公認で研究されていた花の一種なのだと。

その特性は、チャクラを吸収して大きくなるというもの。

しかしままではどれだけあたえても花は、五センチ以上背丈が伸びることもなく、本当に小さなパンジーのよつた可憐な赤い花を咲かす程度だったとか。

それには口はないそつだ。

つで、気付かなかつたオレも悪いが、つまるところ オレの黒炎をあび、その炎を浴びたことで黒いチャクラ¹を吸收。チャクラコントロールだけはダレよりもうまいオレが、この身体にありあまるチャクラを有意義に活用したところ、黒炎は予想を上回るほどチャクラが濃縮されていたようだ。

そのため要領をはるかにオーバーするチャクラを一気に吸つてしまつたそれは、ひそかに家の床や壁に根を張り、オレが支柱を燃やしている間に見えない場所で成長を続け

「家が崩壊したと」

「急成長で変異が起きたよつじやのう。大蛇丸。おぬしどれだけのチャクラをあたえたんじや？」

「ざつとうちは一族秘伝の車輪眼による秘術【アマテラス】を二倍掛け合わせたレベルですかね」

「ふつーーー！」

「うわ。きたいですよセンセー！」

報告を兼ねて火影邸にいったとき、たずねられたこと、さらつと答えたたら、茶を飲んでいた猿飛ヒルゼンが勢い欲ソレを噴出した。とつさによけたけど、猿飛ヒルゼンはむせたまま。

ナルトだったときの計算とはずれたチャクラ量にびびりあわてて計算しなおしたから間違いないんだけど、なにをそんなに驚く必要があるのだろう？

事実なのに。

とりあえず。トライプ三田田ではやくも家をなくしたオレ。チャクラコントロールが得意といつても、以前のナルトだった自分にはチャクラがなかつたので、自分の身体に必要以上にチャクラが溢れていることになれない。

うーん。

もう一度、一から修行しなおやつかな。

オレがひとり考え方についていると、なにか言つていたらしく三
代目がきた。

「いい加減にひとのはなしをきかんかい！！」

まあ、こんな生活も・・・わるくない。のかな？
や。いまの時代が戦時中でなければね。
ついでにオレが大蛇丸だって事実がなければもつといいのに。

いつ ぱいじゅ。

オレが大蛇丸じゃないで。

どうしたら信じてくれる?

どうしたら話を聞いてくれるだらうか。

怒り心頭顔まつからな三代目をチラリと一瞥し
オレは自然と口端が持ち上がるのに気付いた。
そのままわらわ。

へりへりへ。たまにはあなたがオレに余興をくれればいい。

なあ～に、はじめからこんな話、信じるものがないはずないじゃな
いか。

なら信じて【もらひ】必要はない。
信じ【わせる】だけだ。

どうなるかは、あとのおたのしみ

わあ、いま 告げよ。

「嘘ほよじまじょ。 真実をあなたにお伝えしますや」

おれは笑う。

あなたは・・・

ああ、顔の色が優れないようですね。

大丈夫ですか？

02 あつえないじとばかり（後書き）

文章が読みづらくてすみません。
国語や文法苦手ですみません。——

【クロフデ アザナ】

<容姿>

- ・享年24歳
- ・赤い髪
- ・明るい黄緑の瞳

<その他>

- ・ナルトの前世
- ・幽霊やオーラが見える
- ・なにかを作つたりするのが好き
- ・記憶力はあまりよくない
- ・気配には敏感

【うずまき ナルト】

＜容姿＞

- ・49歳

- ・金髪、前髪だけ赤いメッシュ

- ・青色の目

＜特徴＞

- ・『うずまき』の血が濃い

- ・六代目火影

- ・医療忍者

- ・前世の記憶がある

- ・色んな世界を巡っているらしい

- ・原作知識有り

- ・前世で幽霊が見えた影響からか、チャクラの【流れ】を肉眼で見えるたり感じ取ることができる

＜趣味、好き＞

- ・趣味は忍術開発

- ・好きなものは、もふもふフワフワした手触りの良いもの

- ・平穏

- ・癒されるものならなんでも

＜嫌い＞

- ・甘いもの

- ・難しく物事を考へること
- ・目立つこと

＜チャクラ関係＞

- ・見えるから、チャクラコントロールは抜群
- ・封印術は『うずまき』の血の影響でしつかり習得済み
- ・チャクラコントロールができるから医療忍術が得意
- ・イメージ力（記憶力）がなく、幻術や変化が苦手（記憶力が悪いため、自分が一度なったものでないと変化できない）
- ・幻術を見破つたり解くのは得意だが、自分でかけるのは苦手
- ・空間忍術はできるが、たぶん暴走する

＜九尾との関係＞

- ・九尾とは仲良し
- ・長い年月を共に過ごしたら、魂が融合してしまった
- ・チャクラがないので、いつも九尾からチャクラを借りている
- ・なにをしてもチャクラが増えない

＜転生による影響＞

- ・うちちは一族健在
- ・サスケはマブダチ
- ・暁は義賊集団として有名

＜原作との相違＞

- ・九尾事件なし
- ・両親健在

- ・波風ミナトは極度の過保護
- ・大蛇丸とダンソウは過保護すぎて暴走するミナトのストップバー
- ・三代目は隠居して、家族と仲良く暮らしている（たまにミナトの尻拭いに借り出される）
- ・アスマ？ナガト？自来也？普通に生きてるよ

＜備考＞

- ・表では医療忍者のスペシャリストとして有名
- ・家族以外、誰にも言っていないが、“アザナ”と名乗つて“アザナ”的姿で、開発に籍をおいている
- ・開発部にいるのは、趣味が発展して、新忍術を作りすぎてしまつたため

【大蛇丸（イーナルト）】

＜容姿＞

- ・サラサラの黒髪
- ・黒い目
- ・美形
- ・誰かの皮をかぶつたりすることはない

<備考>

- ・チャクラが普通の人よりも多い
- ・医療忍術にたけている
- ・三代目だけに【本当の大蛇丸】は死に、入れ替わったことを話している
- ・赤髪のアザナとして、医療忍術やら開発に携わっている
- ・ある事件をきっかけに感情の高ぶりで姿が変わってしまう
- ・平穀を望むが・・・

03 蛇はなにを思つて動きます

すべてにはきつかけとなつたる事柄があるといつ。たとえばある純粋無垢な美形の少年が両親の墓前で、白蛇の抜け殻をみつつ、ひとつのかけを得たりする。そのまま大人になった元美少年は、不老不死を望み、それゆえに仲間の中で最も早くにこの世を去つた。

不老不死を求めた【元】美少年は、“死”にソレを求める理由を尋ねられたとき、その理由としてこう答えた。

「ありとありゆる術をして真理を手に入れるためには長い長い時間が必要でね」と。

その真理を知る者はない。けれどそこには、なげさめとして投げかけられたはずの“言葉”。

言葉は眼に見えぬしがらみとなつて、この世で最も重い呪詛。

墓前。蛇の抜け殻。

そしてたたずむ少年。

当時、猿飛ヒルゼンはその子供に告げた。

それは両親の死を悲しむ子供への慰めの軽い言葉。

「お前の両親もどいかで生まれ変わつてゐるのかもしないのオ

いつかまた大きくなつたお前と会つために・・・

しかしそれは大きく少年の心に響き、重さをともなう楔となる。
そして少年の運命はその日より変わる。

不老不死を求めるは、亡き父母と再び出会つため

『それつていつだろ』

『さあてな それはいつだかわからんが・・・』

「そうして【元】美少年な純粋な少年は、悪い大人の甘い言葉にだ
まされ“永遠”を求め始めました。

さぞや少年は両親の死が寂しかつたのでしょう。

再び出会うために追いかけ始めた不老不死の秘術。しかし少年はや
がて“それ”に取り付かれるようにのめりこんでいくのでした」

三代目火影・猿飛ヒルゼンが呆然とする目前、執務室のテーブル
の上に腰掛けるのは、明るい黄緑の瞳に赤い髪の青年。

なにかの物語を朗読するように語ると、「この話になにか心当たり
は?」と面倒くさそうに肩をすくめてあくびを一つした。

そのやる気のなさそうな視線は、ゆるい態度とは裏腹に、そのまま
口を半開きの状態であっけにとられているヒルゼンをまっすぐと捕

らえている。

「まさか、あの言葉がおぬしを・・・」

「え。あー・・・どうだろ?」

「は?」

ヒルゼンの言葉に、赤毛の青年はキヨトンと不思議そうな顔をした後、困ったように自分が今言つたばかりの言葉を否定するような発言をする。

「ロロロと表情をかえ、無邪気に笑う相手に、ヒルゼンがさりに間の抜けた顔をする。

一体なにが言いたいんだと、ヒルゼンの呆然とした顔からありありとその感情がうかがえ、赤毛の青年は苦笑を返す。

「実際のところ、そういう回想シーンをチラッとみたことがあるだけ、オレ自身は大蛇丸じゃないから気持ちとかよくわかんないんだわ。

ただ、間違いなくそれが原因で、あんたの大蛇丸が変人街道に走つて、あげく『オレ』が召喚されたんだけどさ」

「・・・・おぬしの話を信じじろと?」

「ん?信じなくともいいけど・・・」

そこで青年は言葉を区切り

「信じないなら信じるまで現実を見せてあげるよ。

あ、オレ幻術つて苦手だから失敗しちゃつたら『ごめんねえ』三代目

「

「・・・・・」

二ツコリと笑つて、さつそく彼が作つたという忍術の印をくみはじめた青年の行動に、「ひいーーー！」とかすかに悲鳴を上げたヒルゼンの顔から血の気が引いていく。

花が彼の家を崩壊させたとき、騒ぐ二人の仲間を眠らせた青年はヒルゼンに幻術をかけた。

そのときみせられたのは恐怖。

「わ、わかつた。わかつたから『六代目』……たのむからやめてくれ！」

『六代目』と呼ばれた赤毛の青年は、慌てるヒルゼンをみてつまらなそうに印を組んでいた手を下ろした。

「いやだなあ～三代目。もちろん冗談ですよ」

「いやいやいやいやーーーいまのおぬしの目はマジじゃつたぞーーー」「つと、いうわけで。【オレが大蛇丸の不老不死実験に巻き込まれてこつちの世界にやつてきて、大蛇丸になりかわつちやつた未来の六代目火影】だというのは理解してもらえましたね。理解したうえで相談なんですが」

「人の話をきけい！…どこまで強引なんじやおぬしは…！」

「いや。だつていろいろと“大蛇丸”になりかわりとか、この先の未来には不服満載＆不都合しかないので。

ならとつととオレが“大蛇丸”に成り代わったことを認めさせ、オレは自由に生きるに限る。

あとはこれから大蛇丸として生きていかなくてはいけないオレの身の安全を思いまして、“大蛇丸”がやつてきた悪事が、“オレ”がやつたことではないと証明したく。

それとたぶんその原因（三代目のありがたいお言葉の）について追

求し、ひとつと話を進めたかったというわけです。なにか問題でも
?』

青年はなんでもないといわんばかりに、ほがらかにアッハッハと笑
つた。

04 アザナとナルトと大蛇丸

はい、どーも。成り代わり主のクロフテアザナこと、六代目火影
うずまきナルトです。

つと、いうが現在進行形で大蛇丸な自分です。

ややこしいな。

実はチャクラを吸収して巨大化した花のせいだ、大蛇丸の家がなくなってしまったため、一時だけ三代目の元で暮らすことになったのです。

そこで説教をされていたのですが、途中で形勢逆転。

オレが不慣れな幻術も使って、さらには火影としてつちかつた話術をも総動員し口を動かし、三代目にすべて話しました。

戦争とか火影とか里とか忙しいのはわかるけど、だからといって大蛇丸の所業を見て見ぬ振りしていたのは、ソレは優しさではなく、甘さです とね。

だからオレは喚ばれたんだからな。

さらにいうと、潔く、オレの話をきき、きちんと『理解したうえ』で協力していくといった三日目はいい判断をしたと思つ。

オレの言葉を即そのまま鵜呑みにするようなら、ひとつとして表面上しかみていない証。

即、オレはこの里を切り捨てただるつ。

逆に証拠を見せても信じないなら、面倒になつてきれたオレが里をのつとつた。

まあ、それはさておき 話し合いについてだ。

そこは聞く耳持たない奴と、護衛と称してこそこそしているお面集団などは、うつとうしいだけだったので、すべて眠らせ記憶を消してそこらに放置した。そして二代目とオレの二人きりになつた部屋には、周囲には強固な防音効果つきの結界を張つて“逃げられない”ようにした。

ええ。きつちりと、かたあ、つけさせてもらいましたよ。これのどこが話し合いだ。脅しだら？ いや違う違う。

ちゃんとした『話し合い』だよこれはね。

もちろんオレが成り代わったことも、成り代わる前までの大蛇丸の所業も何もかも。

それを脅しといつてしまつたら終わりだよ。

だつて、大蛇丸なんて原作じや「悪」だ。

その原因を作つたのは三代目なので、少し反省してもらつただけ。そしてオレは自分の居場所と、『オレ』つていう『クロフテ アザナ』もとい【オレが大蛇丸の不老不死実験に巻き込まれてこっちの世界にやってきて、大蛇丸になりかわつちゃつた未来の六代目火影】の身の保証をゲットした。

いまでなにか間違いなくしてくれちゃつているであろう存在自体が怪しそうな大蛇丸に成り代わったんだぞ。そんな大蛇丸の性格が突然変わつたら、不信がられるのは明白。『裏側の人ら』や上層部

とかにあやしまれる】をまつてゐる。やつなつたら、オレはどうなる？

今、この世界で“大蛇丸”といえば、オレだ。

そんなかわいそうな立場に陥つた自分の身を守るためだ。

火影（＝里長）からの保証はやはり必要だった。

そこでオレは、大蛇丸としても暮らすが、そんな誰かの身代わりのようない生活は窮屈だと『クロフテ アザナ』の姿で出歩くことを許可してもらつたのだ。

もともとオレはナルトと暮らしているときも、趣味で始めた開発の仕事にいくさいに前世の姿に変化して、前世の『クロフテ アザナ』という名を偽名にしていた。

『クロフテ アザナ』は赤い髪に、緑の目をした男だ。

そんないままでみたことがなかつた男が突然里内をうろついていたら、さすがにいい感じはしないだらう。

ましてや里長の信頼も厚い 未来の“火影”であることを告げて いるためと、弟子の大蛇丸であることにかわりがないから と、なればよけいに。

なんで『ナルト』の姿にならなかつたかといつと、時間軸的にこのまま生きていれば父である波風ミナトが生まってしまい、必然的に容姿が似ていてるおれ達は関連付けられてしまつ。

それにこの時代で『ナルト』の名を出すことはためらわれた。

未来を大きく変えてしまつたら、オレ・・・否、“ナルト”が生まれなくなつてしまいそつたから。

だから『うずまきナルト』の名は絶対名乗らず、【未来の六代目火影】とだけ告げた。

赤毛の姿も『アザナ』といつ名も変化で偽名だと先に告げてあるほど。

結果、了承は得たが、交換条件として、今の時代、極端にすくない医療忍者の育成と忍術始動を義務付けられた。

かわりにオレは、元暗部だつためいままで里で見かけなかった。しかし暗部を続けていられなくなつたため表に出てきたという設定を火影じきじきに頂き、『アザナ』として堂々と里を闊歩できるようになつた。

05 オレ流の話し合いの方式（前書き）

前のページで主人公が三代目とした話し合いの内容について

05 オレ流の話し合いの方法

話し合いの状況

わかってるよ

だからちゃんと語りや

れあ、準備はこころね?

語り合おつ

オレと“お話”しよつか

～これぞオレ流の『話し合い』～

「ここはオレの知らない世界。

原作とも違う。

今、オレが大蛇丸であるため、本当の大蛇丸が死んでしまった
ズレタセカイ。

平行世界 その言葉だけがすべて。

オレがナルトだった世界とはやはり何かがズレている世界。

オレの里は、四代目夫婦は健在で、三代目も幸せに老衰で死に、曉
は義賊集団。

大蛇丸やサスケは、里のヒーロー。

そしてこの世界。

どれもかしこも原作とは違う世界。

それはオレが“ここ”にいるからかもしねりない。

どちらにせよ。オレのなかには【NARUTO】といつも三つの世界
の記憶と知識がある。

その中で原作では語られない数々の裏話が、こうして実体験をする
と悪いところも含めて目についてしまつ。

たとえば猿飛ヒルゼン。

彼は甘い。

火影をしていたオレじゃなくても、そう思つだらつ。
ひととしてはできたひとなのだろうが、できすぎて聖職者のように
と思つ時がある。

オレはそれを偽善。いや、砂糖菓子のようだと思つ。

甘さは時に人をだめにする。この世界のヒルゼンはそれが強い。
オレの知る世界の三代目は物凄い苦労をしていて、それがすべて目
に見える形で動いていたし、叱るべきところはきちんとしていたから、
オレの世界の大蛇丸は里に残つていたわけだ。

だつて、まがりなりにも猿飛ヒルゼンは、三代目火影であり、同
時に大蛇丸の師でもあるんだ。

火影なら、里人でもある大蛇丸にしつかり言葉を与えて、だめなとき
はだめと叱つてやるべきだつた。

里を思つなら、里の害になりえる者には疑いを持ち、ソレ相応の対
応を見せるべきだつた。

同時に猿飛ヒルゼンは、最も大蛇丸の近くにいた大人だ。だからこそ
彼の心情の変化に気付いてやるべきだつたんだ。

それがこの世界では、ないように思う。

原作どおりの会話を一人がしていったのは確認済みだ。

もし大蛇丸の奇行を見て見ぬふりをしていたり、同情なんて悲觀
が混ざつて放置していたのだとしたら、それは優しさではなく自己
満足だと思う。

オレがそんな甘つたるさにつかつてしまえば、いろんなみで性格
や思考が捻じ曲がりそうだ。

「誰かがきっとあやつを変えてくれる」「自分には無理」なんて客
観的希望的発言は、少しも努力をしていない人間が言つてはいけな
い。ダメもとでも、何度も、それこそ原作のナルトのように体當
たりで挑み続けるべきだつた。

ましてやこんな無情な忍の世界だ。

それこそ誰かがどこかで止めなければ、悪意や憎しみは止まるすべ
を知らずあふれ出すだけだ。

大蛇丸という存在に対して、なにもやつてもいい三代目。

三代目がするべきだったのは謝罪ではない。

その『後』だ。

『後』に何かをする。手を差し出したまま放り投げるだけじゃなく、
そのあともしつかりと導き、行動に出すべきだった。

だから、それが甘いと思う。

そうして大蛇丸は、永遠という存在に、研究に、
とりつかれた。

「まつ、いまさら何を言つても遅いけどな。だつて本物の大蛇丸は
すでに死んでいる」

「ろ、六代目……」

「つと、いうわけで。オレの身の保証はよろしく三代目！
できないなんていわせないよ。」

だつて実質的にオレをここによんだあの実験のせいで大蛇丸は死ん
じやつたわけだし。そんな危険な実験をさせた原因つて三代目の甘
さからだしね。

ねつ。ここでオレの身柄を自由にしないと

」

語るだけかたつて、ニッコリ笑う。

に一つ一つと印を

「ま、まてまて！わかつた！わかつたから……その印を結ぶのをやめてくれ……」

慌てて、血相を変えてブンブンと首を縦に振りつつオレの次の言葉をさえぎる声。

そうしてオレの話し合いは幕を閉じる。

勝ち取ったのは身の保証と、身分と戸籍など。

オレは大蛇丸として以外にも、アザナとしてこの葉の額宛を授けられた。

そして大きな三代目火影の安堵のため息と共に、だされた条件に、少し考えたあとに承諾した。

オレの身の安全の保証と、大蛇丸じゃないのでオレはオレらしく生きる権限をもらつた。

あと立場だね。

これは、大蛇丸みたいに殺しなんかしないよ。人殺し？いやだね。面倒だよ。

なのでナルト時代からやつていた医療忍術に貢献することにしました。

ちょうどこの時代ではまだ医療忍術の確率化が難しいときだったようだしね。

契約成立だ。

うん。いい話しをしたね。

さて。オレは今、赤毛のショートカットに明るい黄緑の目をした二十歳ぐらいの姿で、『アザナ』と名乗つて医療忍者として活躍している。

立場は上忍。

今まで姿を見せなかつたのは暗部で働いていたという裏設定つだ。これはオレがオレとして自由に動くために、三代目と交わした条約のひとつ。

身分の保証。

かわりに、オレは持てる限りの知識でもつて里に貢献する。これが三代目との約束だつた。

三代目の許可も何もなく暴れることも、さつさと里抜けすることも本当はできた。

それをしなかつたのは、ひとえにこの身にチャクラがあつたからだ。ナルト時代ではチャクラがなくてひとりではできなかつた技も、この大蛇丸の身体ではできたりする。

ならば追つ手をかけられたり隠れて生きるよりも普通に表で生きたい。

そう考えて、あまんじて三代目との条件を呑んだのだ。

三代目火影、猿飛ヒルゼンにすべてをばらした なかなか人の話を信じないわ、すぐにあるないと茶々を入れるわ、不審者扱いするわ、まったく融通が利かなかつたが、そのぶん時間をかけて“説得”を試みた結果、泣きながら喜んでいろいろ承諾してくれた
あの日から、オレは『大蛇丸』として表の任務がないときは、“アザナ”と名乗つて、ナルトになる以前の姿で、医療班に参加し

ている。

なぜナルトより以前の前世の姿なのかといつて、 “ つずまきナルト ” の姿ではこれから生まれる「ナルト」や瓜二つである父・波風ミナトとすぐに関連づかれ、未来が変わってしまう危険があったからだ。

今では、このアザナの姿もよつやく里人に覚えてもらえる世になり、警戒されなくなってきた。

たぶん木の葉の額宛の効果と、三代目とオレがよく話している姿を目撃されるようになつたからだろう。

これで、大蛇丸としてではなく、一個人として平然と里の中を普通に闊歩できるようになつたわけだ。

ただし、表立つては医療忍者としてでしか認知されていないので、少し面白くないのも事実だ。

なぜナルト時代のように開発ではなく、医療班にのみに顔をだしているかといえば、残念ながら、大蛇丸に成り代わってからはまったくチャクラの“流れ”がみえなくなってしまったのだ。

原因はこの身体が、オレの本当の肉体じゃないから、魂と肉体の波長がいまいち合わないためだ。

そのため新術開発が趣味だつたけど、今はソレができない。

チャクラが術として練られる気配はなんとなく感じるものの、術式が見えないのではどうしようもない。

しかたないので、相変わらずのチャクラコントロールと膨大な医療知識を駆使して、医療忍術を里に根付かせようと活動している。

その活動の一環として、最近では、三代目から預かつた粹のいい若人の育成も行つてゐる。

「師匠、師匠……」

「んあ？」

「うう、あせりひーあせりひー……」

「うう」として、肩を強く揉みふらわされ、でも眠気に負けて開けた目を閉じようとした。

瞬間ものすごい高密度のチャクラが集まる気配を感じ、やれやれとチャクラ自体を封じてからゆっくりと目をひらく。

あぶないあぶない。

気配に敏感でなければ、今頃オレはとある怪力少女の魔拳によつて、クレーターの一部となつていただろう。

チャクラで強化した瞬発芸でもつて、地画と仲良しはカンベンして欲しい。

「なつ！ チャクラ封じ！ こんなこと白眼あたりがないとできるはずは……」

「“できない”なんて思い込んだ。現にオレはできてるだろ」

先程の続きで眠気がいまだ残っているためふあーとあくびが一つこぼれる。

傍の水道で顔を洗えば、鏡に映るのは赤い髪に黄緑の目をした20

歳後半ぐらいの青年。

首元に木の葉の額あてをひっかけるようにかけ、なんだか額あてがないとまったく忍びらしからぬだらけた着物姿の男は、オレの前世“アザナ”的姿。

ナルト時代、火影としてではなく開発部に行くときなどはこの姿でいたが、今回もまた平常時はナルトや大蛇丸の姿では動きにくいので、前世のオレの姿に変化したものだ。

寝ても変化の術がとけないなんて、さすがオレとか自画自賛しつつ、鏡越しにオレを険しい顔でにらんでくる美少女にため息をつく。

茶に近い茶色の金髪に、ちょっと鋭い釣り目。

胸は・・・まだ、それほどでかくはない美少女は、オレが“アザナ”として今一番力を入れている弟子だ。

と、いつても後々医療忍者に向いていそうな奴をみつけしだい弟子は増やしていく予定だが、いまのところ弟子は彼女しかいない。

そんな彼女の名は綱手。

ナルト時代、オレが「ばあちゃん」と慕っていた存在であり、五代目火影そのひとだ。

綱手、大蛇丸、自来也の三人は、ヒルゼンの弟子ではないのかと思うだろうが、なにぶんこの時期すでに火影の地位についている彼が、漫画の力カシ先生やヤマト隊長のようにベッタリ部下にくついていられるわけがない。

なにより大蛇丸はいない。ここにいるのは彼に成り代わった自分。それに自分は三忍顔負けの忍術を会得済みときている。

そのこともあって現在、自来也は別の師をつけ、綱手にはいまのうちから医療忍者として磨きをかけてもらうことになった。

本来ここにいるはずの大蛇丸だが、中身がオレのため、元未来の火影でもあるオレには修行も師も必要ないので、綱手と自来也には大蛇丸は別のカリキュラムをうけていると告げて事なきを得ている。これにより大蛇丸がいま姿を見せずとも誰も違和感を持たないため、

オレは“アザナ”としてのみに集中できる。

そんなわけで、オレは綱手に医療忍術を叩き込む師に抜擢された。
ちなみに自来也に関しては、三代目と相談したところ、基礎などで落ち着くのを見計らい、とつと仙人修行にいかせることになつている。

伝説の三忍（・・・）早期育成計画発動中だ。

いや～。でもよくよく考えると、今のオレと綱手って同じ年なんだよな。

なにせ体は大蛇丸のものだ。
たしか綱手と大蛇丸は同世代のはず。

師として彼女に医療を叩き込んでいるものの、変化の術を解けば肉体は大蛇丸なオレ。

オレが大蛇丸であると知る者からしたら、なんだか変な師弟関係だらう。

しかも綱手は大蛇丸の同期でありスリーマンセルのチームメンバーだ。

そんな綱手が、実は師匠が“大蛇丸”であると知つたら、いつたいどんな顔をするか。

見物だらうな。

みてみたい。

まあ、こちとら、精神年齢だけは上だ。オレの素性を教える気も、うつかりと口を滑らすよつたポカなどする気もないが。

「あの、アザナ師匠。いまの術封じはわたしでもできるですか？」

「・・・あ、ああ。

あ、いや。いまのは無理だな。あれは長年の経験から術の発動を感じ取り、なおかつオレオリジナルの忍術だからな。できたとしてもお前にはまだ早い」

それにしても・・・。

同じ年というのもなんだが、それ以前にオレからしてみれば綱手が若いことじたいが違和感を覚えてしうがない。

だつて、あの「ばあちゃん」だよ。

綱手は、オレの世界では常にナルトの祖母のような位置にいてそれを許してくれて、いつも優しくオレを見守つて九手いたような人で、なおかつオレの前の火影だった尊敬に相対する人だったのだ。若干とはいえ、尊敬をしていたその人が、硬い表情でオレをみている。

しかも術を教えているときは真剣な眼差しだが、表情も態度もどこか硬いまま、オレがぽかをすると胡散臭いものを見るような下げるような目がむけられる。

つまるところ、オレはまだまだ彼女に警戒されているのだ。暗部ぐだりと言われても、今まで里で一回も見たことがないオレを疑つているのだ。

それは忍としては正しい。

同時に、今まで立派な火影という人に師事していた分、そんな胡散臭い奴を師と仰ぐのに抵抗があるようなのだ。

せつかく“火影様”じきじきに教わっていたのに、なんでこんな得体の知れない奴（かなり格下げしている）に・・・と、こういうことだらう。

「いつこの感情が豊かなところは、子供らしく可愛いいんだがなあ」と。

「あ、ば、じゃなくて綱手えー

「はー? なんでしょうか、師匠」

子供らしいんだけど。たしかに可愛いいんだけど。

いかんせんオレら同じ年（肉体的にのみ）。

しかも相手はオレを嫌っているわ警戒してくるわ。

しまいには「寧語」ときた。

他人行儀過ぎる。

向けられる表情も田も冷たいままだし・・・。

こんな“綱手ばあちゃん”いやだ。

思わずひきつりそうになつた顔を一生懸命気合いで押しつぶめ、オレは一度大きなため息を吐き出し、毛を逆立たせるネコのようなく綱手に苦笑を浮かべる。

「前から何度も言つてるが。

たのむからお前はオレに「寧語」を使つな。素でいてくれ

だつて、ばあちゃんに「寧語」で話されると怖くでしょうね。あ、いまは「綱手」だつたな。

ややこしいな。

だんだん「やめやめ」してきた頭の中をいつたん整理すべく、赤い

自分の髪をわしわしとかく。

髪の毛でもひつぱつたら少しづ、痛みで頭もスッキリするだらうといつ甘い考えだ。

だが

無理です。と、即答でキッパリザックリと綱手にひつて切り捨てられたオレは、その場にガクリと思わず膝を付いた。

自分がばあちゃんと慕っていたあの豪快な人が、オレを師匠と呼び、まじめな顔で意見を求めてくる。それも丁寧語で。いつたいどういう状況だと、思わず叫びたくなったことは数知れず。耐えるオレ。結局はオレがなれるしかないのでう。そのあとは、綱手から信頼を得なればだめだ。

本当は今すぐいろいろやつてしまいたい。

むしろ、喉をかきむしって雄叫びを上げて、変化を解くか変化でもして“ナルト”の姿を見せて「ばあちゃんは、ばあちゃんなんだから！オレのことナルトってよべってばよ！」とか言いたくなる。それをこらえることがどれだけ辛いか。はがゆいか。むかしから「ばあちゃん」がいないときには、綱手と呼び捨てで呼んでいたこともあり、おかげで幼い彼女を「綱手」と呼ぶことに抵抗はない。

ただ、なんともいえずやるせないのだ。

（じつめらじじまじらぐ、オレと彼女の静かな抗争は続きそうだ。）

この世界ではじめての弟子に、懇切丁寧に人体の仕組みから医術、医療忍術を教える。

話はたまにヒートアップして・・・

「細胞を活性化させる方法ってのがあってだな

ときたま変な方向へ話は発展したりする。

「どんな術なんですか？」

「ん~。どんなってうずまき一族秘伝？」

「は？」

「ああ、大丈夫大丈夫。綱手はミトさんの孫だし、チャクラコントロールもいいかんじだし、チャクラ量も多いから。できないなんてことはないさ」

「あ・・・いえ。そういうことをきいているわけではなくて（なぜあんたがうずまきの秘伝をしつてているか聞いてるんだよ！？）」

ん？とにかくサクラの心の内をかいまみたかのよつた、副音声が聞こえたような気がしたが。

まあ、顔に出やすい子だからしょうがないかもしねないけど。やつぱり疑われているようだ。

うん。でもそういう子の意外な顔が視たくて、イタズラ心ついてまらないんだよね。

そんなわけで、彼女が言いたいことはわかるが、無視する方向で

「つと、こうわけで」

話を切り返す。

「どんなわけだ！！」

おもいつきり縄手ばあちゃん（若）につっこまれた。
拳じやなくて、怒鳴られただけでよかつた。

ちなみにうつかり素が出ていたが、それはそれ。

「つで、だ。それではお披露目！！

【肉体の肌をピチピチにたもつておける超極秘忍術の巻きー】とく
とみよ。この華麗なる術式を。ちなみにそれを開放するとこつと、
肉体の細胞は活性化し、傷も治る！チャクラ量もあがる！…ただい
ろいろ副作用もあるけどね

「はあ！？」

「うん。さすがに医者でも何でも治せる万人はいないわけで副作用
はどうしてもしょうがないんだよ。なにせ人間の細胞には限度があ
るからな。

ん。まあ、いいよ。とにかくおぼえよう！はい、やれ

なぜか話の流れで、原作でミトちゃんや縄手がやっていた額にひし
形の忍術を教えることになった。

それよりなぜか綱手に「有り得ない。有り得なすぎる……」と激しくつっこまれたけど無視した。

だつて女の子はいつまでも若くいたいものなんだろ?
あとは あれか。

女子といえば・・・

「あ、そういうえば胸を大きくする方法って知ってるか?」

結局、綱手はうずまき一族の秘伝より、胸の話にくいついてきた。
それ以降、なつかれた。
笑顔も向けてくれるようになつたし、素のあの勇ましい口調で話しかけてくれるようになつた。

「・・・女つてこわい」

「 师弟 」

（師匠、アザナ師匠！－！）

（ゴフッ！－！）

（寝ないでください師匠！－！）

（い、いや……寝たくて寝てるんじやなくて、お前の拳が腹に……だつ

てばよ）ガクリ

（ししょー！－！－！？）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5351t/>

ナルトなのに大蛇丸

2011年9月13日15時41分発行